

掛けしました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

<若手優秀発表賞 受賞者および受賞発表題目>

口頭発表(4件)

- I01-05 高木 悠花(東大大気海洋研)
「浮遊性有孔虫各種の光共生性と光合成生理特性」
- I02-03 山田 洋輔(東大大気海洋研)
「黒潮流軸付近において現場型光散乱・透過率粒子測定計で
検出された粒子の鉛直分布と粒子サイズ分布」
- P03-10 藤原 泰(京大院理)
「深水波の直接数値計算: CL2 機構による Langmuir 循環」

- P05-02 大貫 陽平(東大院理)

「統計流体力学に基づく潮汐混合パラメタリゼーションの試み」

ポスター発表(2件)

- I02-P5 金子 仁(水研機構東北水研)
「2000年代のマサバ資源量に関わる黒潮続流・親潮・混合
水域の海洋環境変動」
- I09-P3 北 祐樹(東大院新領域創成科学)
「日本周辺の爆弾低気圧に引き起こされる波浪の検証」

アカデミア メランコリア (第13回) (若手のコラム)

愛媛大学大学院 理工学研究科 博士後期課程2年 眞野 能

第13回の若手のコラムを担当させていただきます、愛媛大学の眞野と申します。今回は海洋観測の魅力や地球科学の魅力について、私が日々感じていることを綴ってみたいと思います。

私は観測で野外に出ることが好きです。普段は愛媛大学の調査実習船「いさな」という全長20mほどの船に乗り、沿岸域での観測を主に行っています。観測の何が楽しいかというと、測器を入れ、取れたてのデータを見て早速あーでもないこーでもないと考えるのももちろん楽しいです。しかし私にとっては何よりもまず、小さい船で海面すれすれを疾走し、潮風としぶきを浴びながら、次々と変化する沿岸の地形、海面の色、海上気温、いくつも現れる潮目、さまざまな魚・クラゲ・イルカの群れ…などを目で見て肌で感じている瞬間がこの上なく楽しいです。現象の空間スケールが小さく変化に富む沿岸域は、私にとって非常に魅力的なフィールドです。

自然と向き合う機会がある職は研究職以外にも様々ありますが、私が修士課程修了後も海の研究から足を洗うことなく博士課程に突入してしまったのには訳があります。私は修士1年のとき(2013年)に夏休みを丸々費やし、1ヶ月半かけて自転車でオーストラリアを縦断しました。当時こんなことが実現できたのは、海のように広い心を持った我が指導教官のおかげでもあります。それはさておき、オーストラリアではほぼ全てテント泊で野外生活をしたおかげで、さまざまな自然現象を体験することができました。南から北上するルートだったため、温帯、乾燥帯、熱帯を通過しながら気温、湿度、植生の変化を目の当たりにし、温帯では凍えながらのキャンプ、熱帯では暑くて眠れない夜を過ごしました。逆風が何日も続く日もあれば、時には熱中症になりかけ、砂嵐から逃げ、スコールの雨雲からも逃げながら走りました。南中高度や月の満ち欠けが徐々に変化する様子も毎日観察できました。新月の夜の、息をのむほど美しい星空は今でも忘れられません。このようにオーストラリアでは、これまで小中学校の理科や高校の地理、そして大学の地球科学等の授業で習い知識として知っていた自然現象を、1ヶ月半かけてじっくり体験することができました。「地球科学を肌で感じた」という表現を通り越して、「地球科学を全身で浴びた」という感覚です。自然現象のダイナミックさに驚かされただけでなく、過去数百年をかけて地球を科学し知識を積み上げてきた先人たちの偉大さに改めて敬服し、地球科学の魅力を再認識しました。このときの経験が強烈に印象づけられた結果、博士課程に進学する道を選択しました。

私は現在、ミズクラゲのパッチ状集群の形成メカニズムを海洋物理学的に説明できないか、という研究を行っています。研究がなかなかうまく進まない時期もありますし、D2のこの微妙な時期、将来は職にありつけるのだろうかという不安も常に付きまとっています。しかし、自分もほんの端くれではあるけれども科学の進展の一部を担っていると考えると、わくわくしてきます。そして、観測に出て現場を見たときは研究の楽しさを思い出せます。論文にまとめられるほどの成果が出たときに初めて科学することの醍醐味を味わえるのですが、まだ暗中模索中の自分は、その喜びを享受できていません。早くその高みに辿りつけるよう、今は粛々と研究を進めていこうと思います。またいつか自転車旅行に行きたいなどという現実逃避思考を振り払いつつ。

